2007

2008年に向けた AJFの挑戦 ～G8・TICADに向けて～

活動日誌

特定非営利活動法人
アフリカ日本協議会
Africa Japan Forum

会員の皆さまへ　2008 年を前に
AJF 代表　林達雄

最近 AJF の事務所に立ち寄るとほっとする。落ち着いた気持ちになるのだ。力を蓄えてきた団体が飛躍を前にしている。そんな余裕を感じさせる。実際、「5 年後の AJF はどうありたいか？」を理事会で検討するなど、将来計画を練ることのできる時期に入りつつある。今お金が入れば、人員増強など自信を持って有効に使える。そんな時期を迎えている。

2008 年は世間では北京オリンピックの年だが、私たちにとってはアフリカの年である。7 月に洞爺湖で開催される G8 サミットの議題の 1 つはアフリカである。5 月には第 4 回アフリカ開発会議がある。この日本でアフリカが話題になる年である。この機会に一人でも多くの日本人にアフリカに対する共感を持ってもらいたい。

着々と準備は進んでいるとは言いがたいが、貧困（開発）、環境、人権と平和に関する NGO が G8NGO フォーラムを組んだ。これまでにない規模の日本の NGO の連帯である。各分野の提言文書を持ち寄り、ポジションペーパーが完成している。あとは政府と対峙し、政策を変更させること、多くの人に知らせバックアップしてもらうことである。これらの動きはアフリカに絞ったものではないが、結果的にアフリカに注目が集まることは確かだ。

アフリカに注目が集まるにしても、アフリカの抱える影の一面だけを強調したくない。死や暗い部分を語るなら、それと対をなすように存在する明るい部分を語りたい。子供たちの笑顔、女性たち・ビッグママたちの愛情、人としての尊厳を知ってもらいたい。

そうした学ぶところの多い友人たちが困難に直面している。その困難はアフリカ人自身がつくりだした、アフリカ独自の問題ではなく、世界の縮図である。日本ともつながる問題である。日本人自身がどう思おうとも、国際的みれば日本は影響力の強い国である。この国の政府や国民が無意識のまま行っている行為が、アフリカをさらに暗くし、その自助努力を踏みつけることが現実にあるのだ。

AJF はアフリカのたくましさや尊厳、共感すべき点を伝えるとともに日本とアフリカの関係を問い直す稀有な団体である。その志に比べると財政面、人材面で力が弱いのが現実である。一同、気を引き締めなおして前に進むつもりなので、一層の応援をお願いしたい。

目次
CONTENT

会員のみなさま、こんにちは。2008 年は TICADIV と G8 が日本で開催され、アフリカに注目が集まる重要な年です。
AJF も 2008 年に向けて、ネットワーク NGO として他団体と協力し、色々な事業を行っています。
悲しいかな AJF の名前が前面に出ないため、日頃分かりにくい事務局の活動を、いくつかまとめてご報告します。多くのパートは事務局員同士のインタビュー形式になっています。
来年に向けて疾走する事務局員の気合いを感じていただき、ぜひ一緒に活動していきましょう！

アフリカ日本協議会　事務局員　一同

目次

2, G8 への取り組み
3, TICAD4 への取り組み
4-5, 在日アフリカ人支援事業について
6, NGO 研究会について
7, 紛争タスクチームと関連イベント「グル・ウォーク」について

稲場雅紀に聞く、G8 への取り組み（インタビュア：三宅紗知子）

三宅：G8 に向けて NGO のフォーラムが作られています。具体的にどういうものか、AJF はどういう仕事を担当しているのかを教えてください。

稲場：このフォーラムの名前は「2008 年 G8-NGO フォーラム」といいます。NGO100 団体（国際協力 NGO）あまりが参加し、今年の 1 月に発足しました。事務局は、JANIC（国際協力 NGO センター）が担っています。
このフォーラムには、3 つのユニット（貧困開発、環境、人権平和ユニット）があり、アフリカ日本協議会は貧困開発ユニットの主要な仕事を担っています。第一期（2007 年 1 月 -10 月）は、市民社会としての政策やポジションを策定することを中心に行ってきました。それがようやく、ポジションペーパーという形で発表できる形となりました（ポジション・ペーパーについては、http://www.g8ngoforum.org/ から入手できます）。貧困開発ユニットには約 40 団体が所属しており、AJF は提言・政策を中心に担当してきました。AJF は、OXFAM Japan、ほっとけない世界のまずしさ、ジョイセフといった団体と協力して政策提言を行っています。同時に、フォーラムの組織づくりに関しても、いろいろな協力をしてきました。

三宅：今まで困難だったことは何ですか？

稲場：ズバリ、膨大な業務量です。ポジションペーパーを作るため、さまざまな団体の意見を取り入れ、何度となく書き直し、調整を重ねました。また、実際にペーパーを執筆する業務もそうとう発生したので、毎日、夜中まで仕事に追われました。こうして一語一句丁寧に作成したのにも関わらず、日本では、NGO の政策ペーパーへの関心が低いため、影響が小さいのが残念です。また、内部の会合に追われ、なかなか政界や財界、政府などに対して、政策提言ができていないというのが現状です。

三宅：G8 プロセスにおいて、AJF としての達成目標は何ですか？

稲場：残念ながら、日本では、政策作りにおいて、NGO や市民社会に自動的に席が用意されているということはありません。なので、政府の担当者や政治家、国連機関など、様々な関係者に、市民社会の政策を伝えて取り込んでもらうことができるかどうかが重要なポイントです。もう一つ、重要なのは、ODA の額です。全てが効果的に使用されていたかどうかは議論の余地がありますが、ODA の総額はピーク時（90 年代末）の 6 割にまで激減しています。よって、日本が ODA の増額に向けて梶を切ることをしっかりと求めるとともに、MDGs 達成のために ODA をどう効果的に使用していくか、この部分で市民社会のアイデアをインプットしていきたいと思います。

三宅：貧困開発ユニットの中には、保健医療のことについて集中的に議論するワーキンググループがあるそうですね。

稲場：はい。日本は、九州・沖縄サミット以来、感染症に対して多大な貢献をしてきました。この勢いをさらに大きくしていく必要があります。途上国の開発に幅広く貢献することも重要ですが、それとは別に、きちんと保健の問題をとらえ、全体とうまく結びつけていく必要があると思います。保健医療ワーキング・グループは、このために、日本の主要な保健分野の国際協力 NGO13 団体が集まって政策形成やロビーイングに集中的に取り組んでいます。

三宅；これからのアクションプランを教えてください。

稲場：G8-NGO フォーラムとしては、2 点あります。
4 月に開催予定の「シビル G8」（各国政府の G8 担当の責任者と、各国の市民社会の公式の議論の場）を最大限に活用し、オルタナティブサミットやパレード、マーチなどのイベントやキャンペーンを行うことです。
貧困開発ユニットのなかにキャンペーンチームとロビーチームがあります。AJF はロビーチームのリーダーを務めています。両者が上手にバランスを取りながら、この G8 という場を最大限に生かす方法を追求したいと思います。また、保健分野ワーキンググループでも、リーダーをしています。G8 では、国際保健が議題になるのは確実です。G8 までに、２月のグローバル・ヘルス・サミットや WHO の総会など、試金石になるイベントをいくつか開催されます。これらのチャンスを最大限活用し、メディアや一般市民に国際保健の重要性をアピールしていきたいと思います。

三宅：最後に会員のみなさんに一言お願いします。

稲場：「政策提言は自分には関係ない」と思わないでください。政策は世界に大きな影響を及ぼします。そもそも、政策提言は難しくありません。日本では、おそらく多くの人が慣れていないだけだと思います。様々なしがらみがある政治家や官僚と違って、やらなければならないこと、必要なことをそのまま口に出して言えるのは市民社会の私たちだけです。また、G8-NGO フォーラムのホームページもあるので、ぜひご覧下さい。ご意見ご質問をお待ちしております。

G8-NGO フォーラム：http://www.g8ngoforum.org/

斉藤龍一郎に聞く、TICAD4（第４回アフリカ開発会議）への取り組み
（インタビュア：近藤徹子）

近藤：来年の 5 月に TICADIV（第四回アフリカ開発会議）が開催されますね。AJF は、今まで TICAD にどう関わってきたのでしょうか？

斉藤 :AJF は、1993 年の TICAD を契機に設立されました。その後 1998 年の TICAD II の際には ACT（Action Civil Pour TICAD）が設立され、2003 年の TICAD III の際は、ACT2003 のメンバーとして活動しました。今回は、TCSF（TICAD 市民社会フォーラム）が事務局を担う NGO のネットワーク、TNnet の運営委員として活動しています。

近藤：お話しにあった "TNnet" について詳しく教えてください。

斉藤：TNnet (TICAD IV･NGO ネットワーク) は、2008 年 5 月に横浜で開催される第四回アフリカ開発会議（TICAD IV）に向けて、日本の NGO 間の情報共有や連絡調整を行い、TICAD IV へ政策的に働きかけを行うことを目的に、2007 年 3 月に発足した NGO ネットワークです。16 団体から始まった TNnet ですが、2007 年 11 月現在では 28 団体が参加しています。
AJF はこれまで、アフリカに関わる日本の NGO が、TICAD に向けて一体となって働きかけをする取り組みのためのネットワークを作る、あるいはそれに参加することで、これまで TICAD に関わってきました。よって、AJF 単体が独自に行動を起こすより、アフリカにかかわる日本の NGO が情報を共有し、意見を交換しながら適切な形で働きかけをする場を作ることが重要だと考えています。
TICAD には、アフリカで活動するそれぞれの団体が、思いつきや個別の要求を考えるのではなく、ネットワークを組んで参加し、アフリカの市民社会が参加できるような TICAD になるように働きかけるべきだと思います。また TNnet の参加団体は、MDGs 達成を目指すことを共通の目的としています。
実は、最初の段階では MDGs を共通課題にはしていませんでした。まずは TICAD に向けてアフリカにかかわる NGO が集まるために始まりました。
TNnet の具体的な活動は、二つあります。
TICAD に向け、TNnet と外務省との定期協議会が、ほぼ 2 か月に一度行われています。ここで、市民の声を積極的にインプットしています。また、TICADIVに関わるシンポジウムの準備や実施の過程を話し合っています。10 月 27 日には「市民が求めるアフリカ開発とは～MDG 達成のために TICAD ができること」という 300 名規模のシンポジウムを開催しました。このシンポには、アフリカから 13 もの市民団体が参加しました。
思い起こせば、93 年は、市民社会は提言書を作って配布しました。98 年のオブザーバーでの参加を許可され、2003 年は市民社会との対話セッションが実現しました。完全ではないけれども少しずつ前進しています。次の課題は、MDGs 達成のために、TICADIVに向けて具体的に市民社会がどのような提言・行動をするのか、ということです。

近藤：TNnet のなかで、AJF としてはどんな役割を果たしているのですか？

斉藤：まず、今まで AJF が行ってきた過去の記録や経験を紹介するという役割を果たしています。すでに外務省との定期協議会や意見交換会の席上でも説明しました。

また、TNnet が適切な形でコンセンサスを作りながら MDGs 達成の目標に向かって活動するネットワーク組織になるために、運営委員会として積極的に活動しています。運営委員は､TNnet 加盟団体のうち 6 団体が委員になっています。運営委員会は、議案を詰めていくこと・情報整理をすること、が主な仕事となっています。

近藤：今後の TNnet の政策提言とキャンペーンの予定を教えてください。

斉藤：まずは、2 か月に 1 度の定期協議をきっちり行い、TICAD にかかわる正確な情報をまとめていく予定です。また、これをアフリカや日本の NGO・市民社会にも情報提供をしていきます。一部の団体が情報を握るのではなく、できるだけ幅広く公開して、TICAD プロセスを広報していきたいと思います。そして MDGs 達成に向けて、市民社会やアフリカ政府、先進国政府がどう行動すべきか？を考えていきます。もちろん、G8-NGO フォーラムとも協力していきます。

近藤：この件に関して、AJF にはどういう取り組みが求められていますか？

斉藤：TNnet の中には、a) 日本の市民社会の提言を、どうまとめていくかという問題　b)TICADIV直前のシンポジウムで、オブザーバーとしてどこの団体を呼ぶか？この機会をどう生かすか？　など、まだ課題が残っています。
また、毎年大賑わいのアフリカンフェスタが、TICAD にあわせて横浜での開催になっています。それに合わせた取り組みも考えなければいけないと思っています。
TNnet のウェブサイトができているので、ぜひご一読いただき、質問をしてもらえると嬉しいです。関心のある方はご質問をお寄せください。定期協議などにもオブザーバーとして参加が可能です。質問をしていただくことにより、情報開示のヒントが得られますし、頭の整理にもなります。アイデアが浮かんだらご一報ください。ぜひ一緒に活動していきましょう！

TNne t：http://www.ticad-csf.net/TNnet/

また、AJF としては、FAO（国際食糧農業機関）・横浜市との共催で、1 月 26 日 (土) パシフィコ横浜にて、市民向けシンポジウム「アフリカの食と農を知る」を開催します。1 月に JICA 横浜で、このプレ企画として東京農業大学によるアフリカの食料や農業器具の展示を行います。また案内を送付いたしますので、ぜひご参加ください。

稲場雅紀に聞く、NGO 研究会「保健分野における国際機関と NGO の連携」の取り組みについて（インタビュア：三宅紗知子）

三宅：NGO 研究会について教えてください。

稲場：NGO 研究会は、AJF が実施している事業の中では、ある程度金額が大きく、また、NGO の能力の向上のために、いろいろな NGO が連携できるという意味で、非常に重要な事業となっています。外務省から委託を受けて実施しています。今年のテーマは「保健分野における NGO と国際機関との連携」です。

三宅：なぜ今、NGO は国際機関との連携が必要なのですか？

稲場：残念ながら、日本の ODA が減少し、日本の民間助成金も人件費をカバーするほどの額を出す財団が少なく、NGO が国内から獲得できる資金には、大きな限界があるというのが現実です。資金を海外にも求めていく必要が出てきています。また、国際機関との連携で、活動を広げることも出来ます。そこで、国際機関との連携により、持っているリソースを活用しあいながら、多様なファンドや活動の可能性を模索していこう、という趣旨で、このテーマになりました。AJF は、これ以外に、「エイズ対策とリプロダクティブ・ヘルスの統合」「エイズ対策とコミュニティ強化」をあわせて 3 つの課題について NGO 研究会のテーマ候補として提案したのですが、外務省側が「国際機関と NGO との連携」を選んできたわけです。

三宅：わかりました。では具体的にはどのような内容で実施されるのですか？

稲場：プロジェクトの実施、アドボカシー、キャンペーンの 3 点において、国際機関との連携においてどのような可能性があるのか？を探っていきます。また、それぞれの機関との会合を設定することにより情報交換や交流を促進し、今後の案件形成に役立てることが目的です。来年の G8・TICADIVに向けて、国際機関と連携し、MDGs の達成に関して世界に訴えていきます。
HIV/AIDS 問題に関しては、必要な人誰もが、エイズ治療やケア、サポート、予防にアクセスできるという「ユニバーサルアクセス」の実現が国際目標となっています。こうした国際目標に向けたアドボカシーを国際機関と NGO の連携で実現するなど、アドボカシー・キャンペーン上の NGO と国際機関の連携も、この研究会のテーマの一つです。また、グローバル化時代の今日、日本の NGO は転機を迎えています。日本人がわざわざ出向かなくても、十分世界に通用する現地の人材が育ってきています。
NGO が、自分たちがやりたい支援を、草の根で行う、ということは重要ですが、それとともに、NGO が、国や地域の文脈で必要とされている事業を、国際機関などとの連携でしっかりと担う、ということも重要です。その国の保健分野の状況や開発の状況に、いかに貢献していくのか？ということが大切になってきます。NGO 業界全体の底上げを図り、国際的に通用する NGO 活動を行う時期に差し掛かっていると思います。よって今回の NGO 研究会では、以下のような体制で行っています。

戦略検討会の開催：関係団体を集めた比較的少人数の話し合いで、戦略的に具体的な連携を探っていく。
・拡大戦略検討会の開催：シンポジウムを設定し、今あるグッドプラクティスを紹介し、MDGs に貢献する事例を打ち出していく。
・シンポジウム：日本の NGO の多様性と、開発のなかで自分たちの事業がどういう役にたつか？を探っていく。

三宅：具体的なスケジュールやイベントを教えてください。

稲場：8 月・9 月には国際家族計画連盟（IPPF）、国連人口基金（UNFPA）、米国国際開発庁（UFAID）との戦略検討会、ユニセフとのシンポジウムや UNAIDS、UNHCR、人間の安全保障基金とのシンポジウムを開催しました。11 月は世界基金とのシンポジウムを行い、12 月は世界銀行や世界食糧計画とのシンポジウムを行う予定です。これまでのイベントの中では、人間の安全保障基金の検討会は、「人間の安全保障」をコンセプトレベルから説明できた好例ともいえます。海外研修もタイとベトナムで、具体的な事例を、実際に目で見ながら探っていきます。

三宅：最後に会員の方に向けて一言お願いします。

稲場：来年の G8 や TICADIVといった機会を最大限 NGO が活用していくには、国際機関や国連機関と連携した取り組みが必要です。AJF は、この NGO 研究会を受託することによって、保健分野の NGO と国際機関との協力を促進していく役割を果たしています。
国連機関にも、市民社会で活躍していた人々がスタッフとして多く参加しています。先日来日した UNAIDS のエル＝ハッジ・スィー渉外・パートナーシップ局長は西アフリカで活動する NGO・ENDA の保健担当スタッフでした。NGO と国際機関・国連機関とのつながりは深いのです。ODA をはじめとする日本政府の資金だけに頼るのではなく、日本の NGO も国連機関や国際機関との連携を深め、財源の多様化を図って事業を行っていく道を切り開く手助けになればよいと考えています。記録や資料もありますので、興味のある方はぜひこの機会を最大限ご活用ください。

稲場雅紀・近藤徹子に聞く、在日アフリカ人支援事業について
（インタビュア：三宅紗知子）

三宅 : 在日アフリカ人支援を始めたきっかけを教えてください。

稲場：「アフリカ日本協議会」という名前が付いているのに、日本に住むアフリカ出身者との関係なしに活動をしていてよいのか？という考えがずっとありました。幸い、アフリカのエイズ問題に対する情報の蓄積が実績となってきた頃、在日外国人のエイズ課題を厚生労働省のエイズ対策研究班の枠組みでやっていこう、という動きがあり、当会も、在日アフリカ人へエイズ啓発や救援という事業をしっかりやっていきたいというニーズから、プロジェクトを始めることになりました。

三宅 : 今年はどのようなプロジェクトを行ったのですか？

稲場：HIV に感染し治療がすぐに必要だ、といった緊急な援助を必要とする人たちに、いかにアクセスできるか？正確な情報を与えることができるか？が重要だと思っています。
また、日本の市民社会も、在日アフリカ人とオフィシャルな形で関わりを持ちたいと考えました。そんな時期、日本に在住しているカメルーン人の団体である在日カメルーン人協会の代表から、カメルーン人の活動家を呼んで、在日カメルーン人にエイズ啓発をしたいという申し出がありました。そこで、こちらで資金調達をし、今年の 5 月に活動家を日本に招待し、在日カメルーン協会と連携して、エイズ啓発のワークショップを行うことができました。
多くの在日カメルーン人は、中古車部品を輸出する仕事に携わっています。昨年、エイズの発症により、数人のメンバーが亡くなったそうです。協会の代表は、コミュニティの重要な人物を喪失する痛手や、遺体の輸送にかかる費用などを鑑み、HIV/AIDS 啓発をしなければならないと考えました。
在日カメルーン人協会と一緒にワークショップを行う中で、コミュニティの実態がだんだんわかってきました。埼玉や茨城には、カメルーン人が数百人レベルで居住していること、カメルーン人協会がその方々をうまく組織していることなどです。こういった実態が分かったことで、さらに具体的なアプローチを今後は考えていきたいと思います。

三宅：過去の事例も教えてもらえますか？

稲場：2004 年、在日ウガンダ人協会と連携して、エイズ啓発ハンドブックを作成しました。また、今年の 3 月に、ガーナ独立 50 周年のシンポジウムを開催し、在日ガーナ人協会のクワシ・チェイ・アモアベンさんに来て話してもらったこともあります。

三宅；今後の展望を教えていただけますか？

稲場：一つの課題は、「アフリカ人男性をどう巻き込むか」ということです。在日アフリカ人は、政治について関心が高い人が多いので、今後は政治をトピックとしてワークショップやトークセッションなどを開催してみたいと思っています。現状では、ほかの事業との兼ね合いで、スタッフ不足の面があるので、資金を得ることができればそういった活動を組織化できるようなスタッフや、アフリカ出身のスタッフの雇用なども考えていきたいと思います。また、在日アフリカ人の方が自分で運営している NGO を、NPO 登録したいがどうすればよいか？という相談などもあり、事務局では随時、丁寧に対応しています。

三宅：アフリカンキッズクラブと在日アフリカ人家族の生活を考える会について教えてください。

近藤：2 つのプログラムは、在日アフリカ人支援というよりは、在日アフリカ人「家族」支援になります。アフリカンキッズクラブは、理事の小島美佐さんの発案で 2006 年 1 月に始まりました。アフリカにルーツをもつ子どもたちや、アフリカに興味のある日本の子どもたちが、アフリカの文化に触れるイベントを、年に 3〜4 回ほど実施しています。アフリカにルーツをもつ子どもはもちろんのこと、日本の子どもも小さいころからアフリカに少しでも触れることで、アフリカを身近に感じてもらいたいと思っています。日本で子どもがアフリカに触れる機会はまだまだ少ないと思います。12 月に 8 回目のイベントを実施します。親子で参加してもらい、家族同士の交流も促進したいと考えています。在日アフリカ人家族の生活を考える会は、アフリカンキッズクラブに参加していたお母さんの発案です。子どもだけではなく、親が心おきなく話せる場所も作ってほしいという要望でした。アフリカンキッズクラブに来てくれたお母さんたちと、いろいろな議論を重ねたあと、最終的にはリソースパーソンを囲むワークショップという形にしました。アンケートを実施し、関心が高かったトピックは「教育」でした。よって今年は、教育に関するワークショップを開催しています。

三宅:楽しいこと、また逆に大変なことを教えてください。

近藤：最近はイベントに 10 組前後の親子が集まってくれるようになりました。子どもたちと一緒に、わたしもアフリカの遊びや文化を楽しんでいます。でもなかなか良い広報媒体がなく、いつも苦戦しています。そのためにも「国際協力」というキーワードだけではなく、「子ども」「多文化共生」というキーワードでネットワークを広げていこうと思っています。最近は、多文化共生センターや、ゆったりーの（新宿区の子育て NPO）とのつながりもできてきました。また、今のところ幸いけが人がでていないのですが、子どものイベントにはセキュリティにも注意が必要です。そこで、イベントには必ず保険をかけています。また、保育スタッフを確保・育成するため、保育スタッフを登録制にしました。現在は、拓殖大学アフリカ研究愛好会の方々を中心に、11 名のご登録をいただいています。ただ、私自身が子どもの教育などに関する専門性を持っていないため、いろんなひとに意見を聞きながら、まだまだ手探り状態で実施している状況です。

三宅：最後に会員の方に向けて一言お願いします。

近藤：お子さんのいる方はぜひ一度遊びに来てください。また、いろいろリソースをお持ちの方、アフリカの文化を子どもたちに教えてみたいと思われる方、そういう方を知ってるよ～と言われる方はご連絡をお願いします！

～Gulu Walk に参加して～

アフリカ紛争問題タスクグループ・運営スタッフ　佐藤　夢、中野　美緒

日本においてアフリカの紛争は、遠い国の悲劇という印象で、なかなか当事者意識を持つことができない。今回、日本で初めて開催された Gulu Walk は、内戦勃発から 20 年という時を経て、遠く離れた東京において痛みを共有できた、記念すべき日になったのではないだろうか。

この Gulu Walk に、AJF の「アフリカ紛争問題タスクグループ」も参加した。このグループでは、2007 年 5 月に、ウガンダ北部の内戦についてレポートを発行した。レポートをまとめるに当たって、内戦が行われたウガンダ北部のグル県（Gulu）NGO フォーラム事務局長や、グル出身で子どものシェルターを運営している NGO の代表、日本の NGO 関係者などへのインタビューを行い、できるだけ現地の情報を集めてきた。それもあり、今回の Gulu Walk も北部地域の人々の声を少しでも日本に届けられるチャンスではないかと思った。

Gulu Walk の前半で上映された、ウガンダ北部の内戦を描いたドキュメンタリー映画、Invisible Children は、東京・渋谷に位置する国連大学の会場を、臨場感あふれる紛争の舞台に引き込んだ。反政府軍である LRA（神の抵抗軍）は 10 代の子供を誘拐し、兵士にする。その理由は、子供は洗脳されやすく、人を殺すことに対する感覚を鈍らせることが容易だからだという。LRA の基地から脱走してきた元子供兵士たちは、兵士のときの過酷な経験からトラウマを持つ。泣くということを忘れた子供もいるという。目の前で兄を LRA に殺害された少年が映画の最後に出てくる。自身も以前、LRA 側の子供兵士にされた。「もしお兄ちゃんにもう一度会えたらなんて考えないようにしてるんだ。だって、考えてもどうせ無駄だからね。でも、もしもう一度会うことができたなら。」と言った後、今まで涙をひとつも見せなかった少年が大泣きし始めた。泣くことを忘れたはずの元子供兵士の涙。北部ウガンダの出来事はこの上なく悲惨だったけれど、同時にこの子供達は大人が想像を絶するほどの回復力を秘めていると関係者は映画の最後に語った。忘れられないつらい体験をした子供たち、その子供たちは同時にグルの未来を担う子供たちでもある。停戦後、グルの未来は彼らによってどのように作られていくのか。そして私たちはそのとき、何ができるのか。この映画はそれを一人一人が模索する大きなきっかけになったと思う。

映画上映の後、このイベントの目玉である Gulu Walk では、オレンジ色の T シャツ、リボン、帽子をかぶった参加者が総勢 60 人、国連大学から表参道をねり歩き、最後は渋谷のスクランブル交差点を通過して宮益坂公園まで歩いた。天気のいい土曜日の夕方という絶好のタイミングも手伝って、かなりのインパクトを道行く人に与えることができたと思う。アフリカの太鼓のリズムに合わせながら“Peace for Gulu! Peace for Africa!”という掛け声をかけ、メッセージを伝えた。“グルの子供たちに平和を” という横断幕や、アフリカの地図を掲げた看板なども効果的に Gulu Walk の意図を伝えたと思う。

まさに「忘れられていた紛争」であったウガンダ北部の内戦は、映画や市民団体の活動などを通して、少しずつ世界の人々にも知られるようになっている。机上で解決策が議論されるばかりであるが、紛争の中で生きる人々のことを一番に考えたい。そしてさらに、グルでの出来事を忘れずに未来への教訓としていくためには、今年だけではなく今後もこのようなイベントを継続的に行っていくことだと思う。そのはじめの一歩に参加できたことはとてもいい思い出になった。

あなたのサポートによって、アフリカ日本協議会の活動が支えられています。
～寄付と会員拡大のお願い～

（1）「寄付」のお願い

AJF の事業の一部は、助成や委託を受けて実施しています。しかし、こうした事業も含め、AJF の財政の根っこの部分をしっかり作っているのが、みなさまからの会費や寄付です。

AJF の活動を支える事務所を維持し、スタッフの人件費を確保し、政府や企業などから独立した NGO として、政策提言や働きかけを進めていくため にも、みなさまからの寄付はなくてはならないものです。
2008 年は、TICADIV（第 4 回アフリカ開発会議）が横浜で、G8（先進国首脳会議）が日本で開催され、かつてないほどの注目が「アフリカ」に向けられ、AJF も政策提言やアフリカ理解促進に関しては、様々な団体と協力しながら最大限の努力をしていく予定です。

そこで、AJF では、アフリカに関心の高いみなさまからのさらなるごサポートを頂きたいと考えています。ぜひとも、絶大なご支援をお願いいたします。カンパの振込先は、以下の銀行口座・郵便振替口座となります。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

〇銀行口座　三菱東京 UFJ 銀行上野支店（普）5305887　特定非営利活動法人アフリカ日本協議会
〇郵便振替口座　00120-3-573276　特定非営利活動法人アフリカ日本協議会

（2）「会員拡大」へのご協力のお願い

ここ数年の AJF の活動の広がりとともに、より多くのみなさまが会員になって下さいました。現在の会員数は 275 名、最も会員数が少なかった 2004 年 4 月に比べて 70 人以上増えています。日本からアフリカへの関心の輪が少しずつ広がっている現在、AJF としては、会員の輪をより大きく広げたいと考えました。

そこでみなさまにお願いです。
会員のみなさま。アフリカに関心を持つ方々が、もしみなさまの回りにいらっしゃいましたら、「AJF の会員になりませんか」とぜひともお声がけくださいませ。

まだ会員でないみなさま。この機会に会員になりませんか？まずは、事務局（下記連絡先まで）にお問い合わせくださいませ。会員になっていただくと　①各種イベントの参加者割引　②AJF-INFO（メーリングリスト）を使っての情報交換③事務所にあるアフリカの本の貸出　④アフリカに関する相談をいち早くお受けする会員ホットラインの使用　などの特典がございます。まずはお問い合わせください！事務局員が、詳しい会の説明などをさせていただきます。
〇正会員年会費は 10,000 円、学生正会員会費が 6,000 円です。

（特活）アフリカ日本協議会

〒110-0015　東京都台東区東上野 1-20-6　丸幸ビル 2F
Tel: 03-3834-6902 / Fax: 03-3834-6903
E-mail: info@ajf.gr.jp / URL http://www.ajf.gr.jp

冊子デザイン：高橋　直人（インターン）

2007 年活動日誌

1/20 公開セミナー「都市ゴミで砂漠緑化！　サヘル地域・ニジェール共和国における試み」
1/22 ミニセミナー「世界アフリカン・ディアスポラ連合エマニュエル・アルゴ氏を迎えて」
1/27 ひろば「東アフリカの主張する布・カンガの魅力に迫る」
2/8 NGO・専門家交流会「米国ファミリー・ヘルス・インターナショナル（FHI)、疾病管理・対策センター（CDC）専門家と保健分野 NGO の意見交換会」
2/17 ひろば「素顔のアフリカ」
2/23　Global AIDS Update 読者の集い「『国際エイズ会議』と世界のエイズ政策の変遷〜アジア太平洋エイズ国際会議（スリランカ）に向けて〜」
3/3　アムネスティ・AJF 共催シンポジウム「ルワンダ再考」
3/24 ひろばシンポジウム「ガーナ独立から半世紀：今考える、アフリカのこれまでとこれから」
4/21 ひろば「保健師は見た！愉快なアフリカ、豊かなアフリカ〜アフリカ武勇伝〜」
4/29 アフリカンキッズクラブ「みんなでアフリカの文化に触れよう！」
5/15　Global AIDS Update 読者の集い「HIV/AIDS 新規予防技術開発の可能性〜コンセプトと研究開発の現状〜」
5/18　アフリカの HIV 養成者リーダーと日本の NGO の懇談会
5/19・20 アフリカンフェスタ 2007 in 日比谷
5/26 ひろば「オヤジが語るアフリカと国際協力〜ブルキナの名物オヤジと呼ばれたい！〜」
6/16 在日アフリカ人家族の生活を考える会・教育に関するワークショップ
6/17 アフリカ日本協議会・会員総会
6/19 アフリカの子ども専門家を迎えた NGO 懇談会 (他団体と共催)
6/23 ひろば「ジャーナリストが出会った子ども兵士たち〜アミンが残した憎しみの連鎖〜」
7/28 ひろば「TSOTSI(ツォツィ) と暮らした私〜南アフリカ・スラムの現実〜」
8/1 Global AIDS Update 読者の集い拡大版「国際保健課題と G8・バルト海から洞爺湖へと受け継がれた課題〜HIV/AIDS 対策への普遍的アクセスをどう達成するか〜」
8/2 会員交流会・オフ会
8/4 アフリカンキッズクラブ「親子で楽しむ、自由で楽しいアフリカお絵かき教室」
8/20-22 ダンス・フォー・オーファンズ　ダンスイベントにブース出展
8/30 外務省主催 NGO 研究会戦略検討会「国際家族計画連盟（IPPF）との連携」
8/31 外務省主催 NGO 研究会戦略検討会「米国国際開発庁（USAID）との連携」
9/9 NGO まつり in 上野
9/14 外務省主催 NGO 研究会戦略検討会「世界保健機関（WHO）との連携」
9/19 外務省主催 NGO 研究会戦略検討会「国連人口基金（UNFPA）との連携」
9/22 ひろば「アフリカ映画最前線！カメルーン若手作家の魅力」
9/26　外務省主催 NGO 研究会シンポジウム「世界の子どもたちによりよい保健と教育を !!〜保健と教育分野の MDGs 達成に向けたユニセフと NGO のパートナーシップ構築をめざして〜」
9/29 公開セミナー「ナイジェリアのキャッサバ・現状と課題」
10/6・7 グローバルフェスタ 2007
10/6 会員参加企画「5 年後のアフリカと AJF を語ろう！」
10/16 外務省主催 NGO 研究会「人間の安全保障基金との連携」
10/17　外務省主催 NGO 研究会シンポジウム「HIV/AIDS 予防・ケア・治療への普遍的アクセスの実現に向けて〜目標達成のために何ができるか：UNAIDS と NGO の挑戦〜」
10/18 外務省主催 NGO 研究会「国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）との連携」
10/20 ひろば「関西からアフリカのエイズ問題を考える」（他団体と共催）
10/20 ウガンダの紛争を考えるイベント「GULU WALK　アフリカの平和のためにふみだそう」（他団体と共催）
10/22　NGO の HIV/ エイズプロジェクト経験交流会「住民が主役、にチャレンジ」（他団体と共催）
11/17　外務省主催 NGO 研究会シンポジウム「世界エイズ・結核・マラリア対策基金〜三大感染症克服に向けた新たな官・民・市民社会パートナーシップの挑戦〜」
11/23 ひろば「フェアトレード A to Z〜タンザニア・ルカニ村のコーヒーの事例から学ぶ〜」
11/28 「南アフリカ座談会〜アフリカの大地に生きる二人の女性が語る」（他団体と共催）
12/2 アフリカンキッズクラブ「親子でアフリカの文化を楽しもう〜コンゴ民主共和国編〜」
12/5　公開セミナー「アフリカにおけるバイオ燃料問題」
12/14　外務省主催 NGO 研究会「世界食糧計画（WFP）との連携」
12/15 会員交流会「2008 年に向けてアフリカを語ろう！」
12/15　TOKYO BOUZ COLLECTION「世界にお布施 !」出展　アフリカ BOUZ on Stage　在日アフリカ人障害者講演会
12/21 外務省主催 NGO 研究会シンポジウム「グローバル化時代の国際保健 NGO〜何を改革し、何を守るべきか〜」